アジアを見る眼 95

河森正人 著

一九三二年立憲革命から六十年余りのタイ現代史のなかで、
さまざまな変革思想や民主主義思想が現れ、実践に移されようとした。
その多くは軍人や政治家などのエリートが社会の「上から」
移植しようとしたものであった。
他方、現在の国家がかかえる問題を前に、
タイはこうした「思想」によってではなく、市民生活から自ずと現れる
「下から」の要求と国際政治経済という「外部から」の圧力によって
自己変革を余儀なくされるだろう。

タイ
変容する民主主義のかたち

アジア経済研究所

アジアを見る眼 95

タイ——変容する民主主義のかたち

河森正人 著

アジア経済研究所

著者紹介
河森正人（かわもりまさと）　1959年生まれ
1982年　同志社大学文学部社会学科卒業
1985年　金沢大学大学院文学研究科修了
1985年　アジア経済研究所入所
1989-91年　タイ王国タマサート大学タイカディー研究所客員研究員
（アジア経済研究所海外派遣員）
1993-95年　在タイ日本国大使館専門調査員
現在　アジア経済研究所動向分析部研究員

タ　イ
—変容する民主主義のかたち　〔アジアを見る眼〕95

1997年3月31日発行©
著　者　河森正人
発行所　アジア経済研究所
東京都新宿区市谷本村町42
電話（代表）3353-4231
印刷所　㈱クイックス東京
東京都豊島区池袋1-36-1

落丁，乱丁はお取替え致します　ISBN 4-258-05095-4 C1233

定価（本体1,400円＋税）

タイ――変容する民主主義のかたち

河森正人 著

一九三二年立憲革命から六十年余りのタイ現代史のなかで、
さまざまな変革思想や民主主義思想が現れ、実践に移されようとした。
その多くは軍人や政治家などのエリートが社会の「上から」
移植しようとしたものであった。
他方、現在の国家がかかえる問題を前に、
タイはこうした「思想」によってではなく、市民生活から自ずと現れる
「下から」の要求と国際政治経済という「外部から」の圧力によって
自己変革を余儀なくされるだろう。

アジアを見る眼 45

目　次

はじめに

第1章　民主化へのアプローチ　1

1　タイ現代政治への政治社会学アプローチ　2

タイ政治研究の流れ／平準化の物質的基盤／平準化と民主主義

2　民主化と新中間層論の再考　9

近代化論と民主主義／タイにおける新中間層論の端緒／現代タイにおける民主化運動の担い手／国王と参加型民主主義

第2章　立憲革命体制下の変革思想　17

1　一九三二年立憲革命の性格　19

個人・国家・民族／社会経済史からみた一九三二年立憲革命／「上からの」革命

2　自由主義的社会主義　24
プリーディーの経済計画案／プリーディーと西欧社会民主主義／プリーディーの「協同組合社会」／思想的指導者としてのプリーディー／フェビアン社会主義／大衆小説と個人主義
3　自由主義とナショナリズム　40
ルワン・ウィチットワータカーンの自由主義／進歩主義／進歩主義と民族主義の矛盾／ナショナリズム下の官僚層／戦時下の民族主義と農村／戦後におけるテクノクラートの台頭と経済自由主義／戦後におけるパトロネージの形成
4　戦後の左翼運動　52
戦後の社会主義運動／チット・プーミサックとアナーキズム／共産主義運動の展開
第3章　サリットの「革命」と民主主義　61
1　サリットの政治思想　63
「総力戦」思想／議会制民主主義批判／民主主義と人権観／ナショナリズムと「革命」／国策と仏教

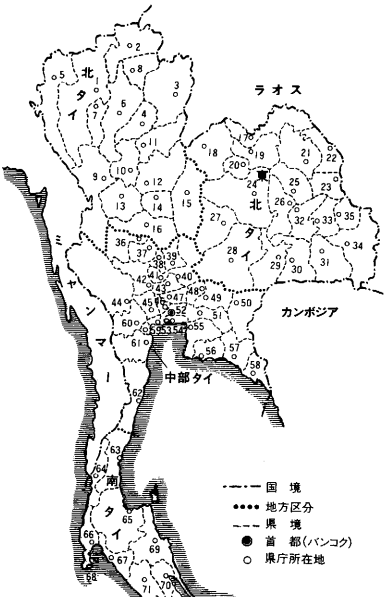
2　自由主義の復権　72
自由主義の復権／経済自由主義のブレーン／新中間層／工業化と教育
3　アメリカ近代化論と一九六〇年代のタイ　80
アメリカ近代化論とタイ／アメリカ人によるタイ研究／アメリカ人と民主主義の誤算／若者とアメリカ文化
4　共産主義運動と学生運動　87
共産主義の浸透／政府の共産主義対策／学園の思想状況／学生運動の高まり
5　国王の「タイ式民主主義」　96
国王と軍部の関係／もう一つの「タイ式民主主義」
第4章　民主化思想の競合　103
1　一九七三年学生革命と国王の「タイ式民主主義」　105
一九七三年学生革命／プミポン国王の裁定／国王の「タイ式民主主義」の優位性
2　社会民主主義の復権　113
政党の社会主義への転回／タンマ型社会主義

3　共産主義運動　117
学生運動の高揚／血の水曜日事件／学生運動の共産党への接近／森での生活／タイ共産党の硬直性／アナーキズム
4　陸軍内の改革思想　126
プラサート・サップスントーンの「変革思想」／チャワリット元陸軍司令官と民主軍人団／チャワリットの四段階民主化論／「青年将校団」
5　軍部型「タイ式民主主義」の復活　134
一九九〇年代初期における対立の構図／一九九一年二月クーデタ／議会独裁批判／「青年将校団」批判

第5章　参加と法治による民主主義　145
1　五月流血事件　147
スチンダーの首相就任／五月流血事件／国王の「タイ式民主主義」の再現／チャムロン元バンコク知事の対応／チャワリット元陸軍司令官の対応
2　民主化運動の担い手　157
経済発展と民主化／農民団体／教員団体／学生運動／労働運動／医師団

体／民主化要求団体／新興資本家
3　参加型民主主義の萌芽　170
学者の市民社会論／市民社会形成をめぐる二つの思想／バンコクの市民運動／地方の市民運動／五カ年計画策定への市民参加
4　立憲主義の試み　178
立憲主義／チュワン政権下の憲法論議／バンハーン政権下の憲法論議／市民参加による憲法草案作成
おわりに　187
主要参考文献　191

タイ王国		宗教	仏教(上座部)(ほかにイスラーム教)
面積	51万3114km²	政体	立憲君主制
人口	5980万人 (1995年12月末現在)	元首	プミポン・アドゥーンラヤデート国王
首都	バンコク(正式名はクルンテープ・マハーナコン)	通貨	バーツ(1米ドル＝24.91バーツ,1995年平均)
言語	タイ語(ほかにラオ語, 中国語, マレー語)	会計年度	10月～9月



タイの県(チャンワット)名
(県名は県庁所在地名と同じ。)

北タイ上部
1. チェンマイ
2. チェンライ
3. ナーン
4. プレー
5. メーホーンソーン
6. ランパーン
7. ランプーン
8. パヤオ

北タイ下部
9. ターク
10. スコータイ
11. ウッタラディット
12. ピサヌローク
13. カンペンペット
14. ピチット
15. ペチャブーン
16. ナコンサワン

東北タイ
17. ノーンカーイ
18. ルーイ
19. ウドンターニー
20. ノーンブアランプー
21. サコンナコン
22. ナコンパノム
23. ムクダーハーン
24. コーンケーン
25. カーラシン
26. マハーサーラカーム
27. チャイヤプーム
28. ナコンラーチャシーマー(コーラート)
29. ブリーラーム
30. スリーン
31. シーサケート
32. ローイエット
33. ヤソートン
34. ウボンラーチャターニー
35. アムナートチャルーン

中部タイ
36. ウタイターニー
37. チャイナート
38. シンブリー
39. ロッブリー
40. サラブリー
41. アーントーン
42. スパンブリー
43. プラナコンシーアユタヤー
44. カーンチャナブリー
45. ナコンパトム
46. ノンタブリー
47. パトゥムターニー
48. ナコンナーヨック
49. プラーチーンブリー
50. サケーウ
51. チャチュンサオ
52. クルンテープ(バンコク)
53. サムットサーコン
54. サムットプラカーン
55. チョンブリー
56. ラヨーン
57. チャンタブリー
58. トラート
59. サムットソンクラーム
60. ラーチャブリー
61. ペッチャブリー
62. プラチュワプキーリーカン

南タイ
63. チュムポーン
64. ラノーン
65. スラーターニー
66. パンガー
67. クラビー
68. プーケット
69. ナコンシータマラート
70. パッタルン
71. トラン
72. パッタニー
73. ソンクラー
74. サトゥン
75. ヤラー
76. ナラティワート

(出所)アジア経済研究所編『アジア動向年報 1996』アジア経済研究所, 1996 年。

「アジアを見る眼」シリーズ発刊にあたって

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦後、古い植民地体制から脱して振興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにある。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流行の理解によるパターンを以ってするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があって、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かって、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七カ年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所　東　畑　精　一